

アラン

ガブリエル詩集  
(上)

高村昌憲 訳

## ガブリエル詩集 目次（上）

---

書物へ

デカルトへ

ガブリエルへ

ペシー

逃亡者

時間

I 訪問

II 「不幸になってはならない」

小麦の藁

寝椅子

それを知れ

海賊

彼女は語る

泉

秋

ガブリエルへの献辞

人生

孤独

沈黙

大空

征服者

思い出

景色

グリザイユ（灰色の風景）

月

灰色の朝

トレベロン

十二月の朝

朝にて

ソネット

冬

感謝

あなた

ガブリエルの『魅惑』について

少し悲しい夢

異教徒の詩

釣り人

冬の到来

五行詩

三月の三行詩

## 書物へ

---

(ポール・ヴァレリー風に)

あゝ書物よ 最も軽くふわふわして

最も繊細な絹で作られたものよ！

あゝ両手には触り心地良く紡ぎ上げられた生地

眼にするもので最も美しい繭でできた清らかな花

あなたの白い故郷は白い砂のように深く

忘れられた色彩となり

Zの文字が耐え難き黒となってくるや否や

その足は折り曲げられる

二重になった円天井のmの上に

あなたはiという柱が建つを見る時

二重になった磔柱のTと 無音のeは

その道端の上に座り込む

あなたは何を知っているの？ 思想を生めるのは

喪失であるとあなたは分かっているの？

そして あなたが押し付けた紙に観念の形が出来るのは

僅かな白い部分であるとあなたは分かっているの？

あなたが心の中に平和を感じるのは この白い流れ

黒い小鳥が撒き散らすのも この白い流れ

疲労困憊させる回り道から別の感覚が生まれても

しかしながらそれは同じものなのだ

(G・Lの中国の本について 一九二六年十月二九日)

## デカルトへ

---

あなたのピロードの瞳と厚い唇の上  
信頼と優しさが初めは眠っているだろう  
その境界の上で長い間躊躇する天才  
裸になった権力と弱々しい優雅の間で

すべてが光り輝き 艶を生む金銀細工師  
長い間映し出していた噛み応えのない秩序  
身を振り黄金の糸をもつれさせるパルク  
後悔と死 ゆっくりと熱くなる愛の熱

あなたは全てを生んだこの世の退屈を知り  
結果と原因を地上に振り落とすことを望み  
あらゆる経験が渦巻く砂塵の中へ置き直す

仮面と謝肉祭を最後には軽蔑して  
馬の足元の古き秩序を踏みつぶし  
疑う余地のない懷疑を生きた〈神〉

(ガブリエル・ランドルミのために 一九二八年四月二七日)

## ガブリエルへ

---

不在 私の親愛なる存在 あゝその違いよ！  
あゝ私の過去の存在を知れば 現在の私を拒絶する  
日々は空しく 必要のないバラの香り  
決して見ないこと 全ては空ろで 事物もこの世にない  
この黒い大洋の水平線の向こう側に  
私の眼では見ることができない一点に何時も定まる  
その場所は決して存在せず そしてその大河には岸がない  
時が私たちの間に流れる 動きのない旅  
夜の上に 昼の上に 季節の翼の上に  
あなたはまるでリズムカルな歌の終わりまで  
拍子から拍子を生む歌のように親しいイマージュを逃れる  
かくして思い出は遠くへ行き そして私の思いは  
今はもうないものと 嘗てからなかったものとの間に  
一つの足跡も残さずに軽く触れることしかできない  
悔恨も逃れ 一日一日の新しい曙も退き  
溜息はまだ一つも存在していなかったし  
その他の踊るような苦痛も既にもうない  
かくして満ち潮と引き潮の波間の上で  
私は何時も見張るように遠くのあなたの顔を出迎える  
あなたの両眼は私の方を振り向いて言うのだ 勇気を！

(一九二九年六月二五日)

赤い屋根の教会はもうない 私があなたのために  
壊れやすいそのイメージを書いた幸せな日は  
単に灰や塵だけではなく 粘土で出来た器は  
私の思い出に暗闇を映す鏡でしかない

私は今朝の霧の中で空しくあなたを追う  
親愛なるイメージは私の無駄な疾走に欺かれたもの  
私は何も分からない 時間は腐蝕し  
既にそれらの現場よりももっと早く幻想を切断する

峻厳な地平線や平原よりももっと遠くに  
黒い波間の彼方に 私の苦悩の彼方に  
最早存在しないその赤い教会のはるか遠くに

あなたは残されたもの全ての忘却を警戒する  
金色で縁取られ そしてあなたが嘗てそうだったように明るい  
その肖像は宗教と無縁の部屋の中で私の蒼白い顔を映す

(一九二九年九月三日 ペシーにて)

## 逃亡者

---

あゝ私の美しい弓 私の肉体の力に緊張して  
金色の額をしたアマゾネスのベルトは蒼白い  
獵師を思い出せ あなたの体が堂々としているので  
優しい人を拒絶し 後で傷つくのを拒んでいた

あなたは逃げる 最早あなたはあなたではない 鉄よりも固く  
熱くなる甲冑もなく 私は自分を傷つけた  
しかし あなたの白い背中は大気の亡霊と混交し  
あなたの両足は拍子をとって揺れている

あなたは言う「あゝ征服者よ 私はあなたを見たくない  
私は臆病に陥るだろうし 弱くもなるだろうが 誰が  
節操の無さを押し通し簡単に捕えられるか分からない」

何故なら あなたは私とは全く別の者のために誓うのだろう  
しかし 私はあなた以外の者のためには誓わなかった  
私が接吻するのはあなたの古い噛み傷の上

(一九二九年九月三日 ペシーにて)

## 時間

---

森の向こうのそしてその頂の向こうの  
その山の深淵に光が翳め  
大洋の青緑色の一滴の水が生まれ  
今その下で大きく開いた深淵に傾いた天体も  
大空の中心を支配し あなたを見つめる  
そして思考の戦士である私は その回りで  
何時でも私の心の警報に従って用心して  
回転する私の惑星を追いながら尋ねる  
しかし大空は動かず 私の心は苦しむ  
私は二重に見える閃光の中に答えを読む

### 五 時

偉大な馬 ペガサスは真夜中に何を言うのか？  
一衰弱した希望は思い出すこともない  
細長い肉体は波打ち さらさらとした流れを夢見る  
そして昔からの締付けをその中で解いている

### 八 時

高潔な狩人オリオンよ あなたが見るものを私に言え  
一その広がりには透明で森を映す  
ほっそりした草と空 澄み切った明るさ  
忠実な月には永遠に続く回帰  
和らいだ体力の釣り合いの中で  
優雅さが官能的動きを一つに溶かした

### 十一時

銀色の聖母マリアは思考の目覚めを待ちわびる  
一或る女性を逃れながら、そして愛した女性に背きながら  
子供のような唇を突き出し 柔らかな花は

懐かしい青春の味わいを試みている  
彼女の手の褻が彼女の清い心を押し  
古代の姿と無垢な儘の将来の約束を探している

## 二 時

太陽のあなたは既に あそこの丘の上に高く  
それを不意に襲う  
—もう遅すぎる。天然の真珠の如く  
私は月光の夜が輝くのを見た  
水の精が逃げて行く時は露な片腕がその儘見える  
今 籠の中に甘い果実が置かれ  
金色の睫毛は蜜蜂の動きのことを考える  
しかし素早く動くその腰は溜息を騙し  
昼間の防御器官は欲望を最も高い褻の方へ  
高めていき あなたは走ることができる陸上選手  
あなたの方に思い切って微笑しろ 今は詩人の時間だ

## 五 時

重々しい太陽よ あなたが軌道の頂点で跳んだ時  
あなたは広大な地平線に向かって降下する  
二つの幸福よ！ けれども大熊座のように  
私の苦しみは大空の中で監獄のランプを何時も掛けている  
あゝ真昼の明るさは全ての影を焼き尽くし  
私の親愛な暗い深淵の清らかな泉に沈む  
全てを暴け！

—装飾と変化の明るさを暴け

光線の中で四散した魂が瞬き  
注意深くもあり全てがぼんやりして 苦悩はなく  
同様に芸術家は思想もなく仕事をするのが分かる

## 八 時

血の色よ あなたは生の前兆か？ あなたは死か？

私は知らない 今 私の運命は揺れている  
太陽よ！ あなたは私から去る！ もう一度一言を 見よ！  
一回の不注意があると何時も見張りを  
そして一寸した退屈から行動を起こすのだ  
既にその真珠は震え 一滴の涙を生むように  
宇宙と混じり合いながら私の光線を断ち切る  
私は独りで眼に見えない警報に驚いていた

## 十一時

金色の星アルクトウルスは 昔の牛飼い  
あなたはこの地平線から世界を見下ろす  
全てを私に言え 何故なら私の心はそれに似て  
そして突然に深い苦しみに悩まされるからだ  
感動しろ 純真な友よ！

一眠れ 余りに繊細な友よ

危険を嗅ぎつける森の雌鹿のように  
夢見る内気な女ときらきらと輝く妖精は  
澄んだ空気で体をきれいに撫でつけ  
狂った動きの中で 幾つもの激発の中で  
回転する飛翔と喇叭手の点呼の中で直ぐに髪を乱し  
彼女の中に炎の一点と思想を思い出す  
乱れた風景と消えた現在よ！  
逃亡の中に彼女は一つのイメージを守る それはあなた

## 二 時

私の心の夜に 魂は私の近くにある  
おゝ喜びよ！ おゝ虚無よ！ しかし手が私に触れ  
私は目覚め 寝床で寝返りを打って震える  
嫉妬した私の肉体が私に話しかけ 不幸を教える  
ベガよ！ 私の青い天体よ！ 私の心の星  
その視線は瞬き 海水のようだ  
他人の両眼のようだ（あゝ！ 青いダイヤモンドによく似た  
それらの拒絶の中に私はこれらの眼を見る）

ベガよ！ もしも私に喜びを与えるなら ベガは神の喜び  
あなたは冷たく無情で 煌めくのだろうか？  
はっきりと言え 固くなったあなたの光線で私を突き破れ  
私の心の中に他者の恐ろしい光を交差させに来てくれ  
一眠れ！ 私は至る処に言語に絶する光しか見ない  
青いマントの地球は夜の中で回転する  
大きな安らぎが人間たちの上に降りてくる 喧騒だ  
喧騒だけが今 翼のある力となってやって来る  
そして大きな渦巻となってやって来て 塩辛い大衆の中で  
彼らの涙は飛び散った水滴でしかない  
聞け！ あなたの運命はあなたの奥深い処へ行く  
そして 野生の匂いがする大蛇のように  
ストライキを思い巡らす苦い海流に従いながら  
長い水脈に混じり合い それらを砕き 始末する  
この様にして燃えるような野生の生活が  
ミルク色の海のような渦とかかわりながら  
不安な冒険や突然の展開を生み  
波のベッドは深く掘り下げて波を大きくして  
そこでの涙は最早溶けた塩でしかなく  
そこで出会うのは欲望であり そこでは全てが平等である  
黒い大きな船と均整の取れた大きな帆船  
そして 全ての恋愛と全ての思想  
束の間の果敢無い約束と永遠の法則  
この偉大なる肉体という法則は あなたよりも博識だ

呼吸は海水の潮のようなものを持っており  
心臓は飛び上がり、それらは繋がれた小船である  
血液は 波と海水の完全なる波動の襲いで  
短時間の幾つもの結び目であり 解けた要望であり  
この宇宙の中では全てが巻かれて伸ばされる  
神に捧げられた夜と忘れがちな昼のように  
深い渦巻のように 大きな波のように  
人間の陶醉と神々の安らぎのように

このことが自然の静謐さと偉大さを生み

澄んだ瞼の下に大きな秘密を隠し  
そして多分 折りたたんだ腕の中には救済がある  
同じ黒い夢がお前の動脈を打ち鳴らす  
あなたの両足が柔らかい蛇で縛られると  
あなたは大地の王子たちが哀れであるのを見た  
それはこの波によるのであり あなたによるのではない  
しかし あなたはそのことを忘れていた

(一九二九年九月七日 ペシーにて)

## I 訪問

---

それらは非人間的な誓いであり 極端な限界しか  
指に残していないことをあなたは断言した  
それでも彼の掌の中に あなたの手の生き生きとした泉を  
あなたは少し前に掴んだ人間を騙すことを考えるの？

結果を否定したいあなたの冷静な両眼は  
光の動きの中に海水を隠す  
それでも余りに慎重な瞼の私はもっと窪んだ道で  
人生と同じ塩の味を知らなかったの？

明瞭なのはあなたの足の迅速で機敏な音だけ  
私の貪欲な耳には教えない筈がない  
あなた自身の程良い体の重さとその揺れ

あなたが出発する時は 走る音の響きから  
あなたの素敵な足音が泉になった窪みの影を  
慎みのない愛人に再び描かせるだろう

## II 「不幸になってはならない」

---

私はあなたの流星のような突然の変化を愛し  
そして あなたの出現は恐ろしく荒々しい  
おゝ私が〈あなた〉と名づけた波よ 恐ろしくそして優しく  
あなたは海のように巻きながら 曙の冠を付けている

私はあなたの口づけを知った そしてそれを何度も味わう  
最初の口づけよ！ お前も思い出せ！ 狂人の中の狂人よ！  
潮の流れも私たちの上にとめどなく流れる  
良く響く私の洞窟の中で今でも岩がしたたり落ちる

あなたは出発した それが陶酔とか絶望であったならば  
私は知らないし知りたくもない この黒い口づけは  
子供だった時の口づけと同じ味がした

今度の口づけも又有害なの？ 誰が知っているの？  
あなたの最も深い処からの帰還と同じで希望よりも美しく  
そしてこの世の涙が波となって巻いている

(秘密の詩集であるG・Lのためのソネット二篇 海の洞窟  
一九二九年九月十日 ル・プールデュにて)

## 小麦の藁

---

金粉の中を 険しい高原に向って  
大急ぎ そして窪地の村々をそのままにして  
私たちは道を引き返し 天国へ昇る  
思い出は飛翔し大地から駆け昇る  
しかし 突然の渦巻は見知らぬ怪物を投込み  
私は旋風を感じ顔面を吹き抜ける  
酒に酔った男は運命に従い 死んでいく

\*

運命の一撃を そっと触れる空気の中で大変静かに  
眠ってそれを私が受入れたのをあなたは知っている  
狂った女教師の最後の口づけのように  
帰還よりも美しくさえある永遠の別れのように  
そして 大きな愛の後の大きな眠りのように  
人を感わすセイレンを呼ぶ声が聞こえるように  
あなたは苦しみを終りにする一撃を望むのだろう  
あなたが希望もなく深淵を飛び越えた時  
あなたの黒い船の中で身をすくめているのは些細なこと  
生きよう！ それが良いのだ 全てが存在しなければならなかった  
そのようにして世界が決めたのは男性教師  
そしてあなたはもう誓うな 何故ならあなたが予感するもの  
それは何でもないからだ 年齢という大河のことは決して書かれない

\*

私はと言えば 私の視線は上昇し 瞑想する  
不幸をもっと高めること もっとゆったりとした行動であること  
私は今ではあなたの断固たる歩みを測定し  
崇められた存在者であるあなたの全ての活動を測定する

\*

時々燃えるような一陣の風が麦の切株に上がり  
回転して巻きついてあなたの欲望のようだ  
それは孤独を抱き締め 喜びの純粋な源泉である  
この世に存在すること その中を夢の中のようによじらせる  
それが生きること この世の力を知ること  
風や太陽や波によって存在するもの  
かくして夏の神が溝の上を飛ぶ  
眼には見えず力強く 形づくられ 振動する大気  
短く 激しく 自由な冒険のために  
金粉と一緒にになった肉体は滑らかになり  
御し難く 果敢無く 動く装飾  
これらの幸福な力を持った洋服とベルトに  
恋する麦藁たちがひらひら飛び交うのが見える

\*

考えろ！ 世紀とは何か 瞬間とは何か？  
何故なら待つことは何時も苦悩と対決している  
金色の閃光が全生涯に成る人のための  
歓喜の麦藁の思い出を知っているのは誰か？

\*

ミルクと金と真っ赤な血をあなたにこねるのは誰か？  
あなたの魂が知っているのは大空のひと切れ  
あなたの両眼は？ 私が最初に見た  
水の光は躊躇し 直ぐに大変優しくなる  
あなたの瞼の下での出会いはいかなるものか？ 私は知らない  
そして大変に柔らかい襟首の上の麦藁を束にした  
部厚い麦の切株に似た手とはどんな手なの？  
最後には私を墮落させたいのか...あるいは救済したいのか  
誰が知るのか？ おゝ金髪か 赤毛か どのような前兆か？  
あるいは木の葉や苔の匂いがどのように苦く  
荒野や岸壁の心象はどのようなものなのだろうか？

波から砂のベッドまで？（おゝ素晴らしい眠り  
月明かりの中で歌いながら寝返りを打ち  
そしてレースのように静かな泡よ！）  
私を引き付けるのは誰か？

それは海のこの動きだった

緋色がかった影の黒い岸壁に対して  
青い輪になって回る海藻と苦い塩よ！  
このようにしてあなたは私の処にやって来た海のヴィーナスだ！

\*

私はそれを望んだのか？ あなたが望んだのか？

それは自ら生まれる

岩の下で合流する二つの水の波のように  
非難する影は決して待ってくれない  
あなたはこの世にしかいない 素晴らしい結果だ  
思い出せ！ 私の口を陶酔した口に変え  
海流は津波のようであった  
あなたの両眼は広大な空であったが思考はなく  
星座の中に幸福を投げ入れていた  
私たちにはこのように決して礼拝もなく  
愚鈍で土だらけの恋人たちが作っている  
その種の戦争に共通した策略もない  
私たちのために〈太陽〉の子は法を拒み  
約束と宣誓以外に信仰はなく  
良く似た重圧から波の動きまでの  
奥深くて無敵のこの確信以外の信仰はなく  
彼は一回きりの接触とか幸福な眠りによって  
光り輝く流星と同じだけの一杯の幸福と  
至福を生んでいたが 試練にも負けないでいた  
そして太陽はもはや試練を必要としていない

\*

結局あなたはそのことを知った 私も知った

世界は私たちの壊れやすい本質を運んでいたことを  
世界は盲目で耳が聞こえず 忘却の名人で  
別れと復帰の名人で 要するにこれが世界だ  
おゝ甘美な肉体の関係よ！ おゝ眠ったような自然よ！  
私の腕の中で優しい恋人は夢見る  
危険地帯の中で微笑している幸福な女だ  
あなたの睫毛でできた甘い木陰に口づけする  
あなたの両手はゆっくりと閉じていく動きだけ  
私たちの現在は結ばれ あなたの乳房の上で思い出す  
陽がゆっくりと広げていく 優しい花よ！  
海からの風は私たちをそこに置き忘れていた

\*

いかなる渦 いかなる風 いかなる波が私と混じり合い  
世界を作り上げていったかをあなたは知っている  
そしてあなたの躍動が私の躍動と二重になって  
栄光のきらきら光る砂金のような黄金の金属の数片と  
いかにして明るいあなたの両眼の中で混じり合ったのか おゝ小麦の藁よ！  
勝利の空の中で あなたは両手の美に応じて  
いかにして織物を振ったのか  
あなたの旗の下で 私は将来を陽気に考えて  
私の渦巻を虹色の形あるものに混ぜて  
私の厳格な思考を金色の輪で飾っていた  
鍛冶屋は花々の冠を戴いていた おゝ影の重さよ！  
一陣の風が上空に吹いていた あなたは私の指の中を滑った  
ぼやけた両眼から逃れて 既に遙か遠くへ

\*

ぼんやりとした夜の中で 最果ての西には  
金色の光 大空の下の荒野  
変わる事のない岸壁 蜂蜜の甘さ  
軽やかな歩き きれいな空気 群をなした思い出  
大海の前で 陶醉した二人に

無駄にも脅迫的な大波のうねりに  
あなたの一番奥深い秘密が私に委ねられた  
それに続いて太陽は沈む 最早全てが失望だけになり  
最後のさよならをして挙げた手が空しい  
約束だ！ そして霧の中で泣いている大きな黒い船よりも  
あなたには時間がないし居場所もない

\*

私が手を広げても無駄だ 私はもう一度  
愛しい渦巻のあなたに再会するだろうか？ あなたの  
若い腰の襜となって巻きつくのはいかなる麦藁と黄金か？  
それこそは偉大なる〈自然〉の秘密である

しかし 鍛冶屋から猟師に戻ったこの私は  
権力という追っ手を撒き もっとあなたの心の側にいて  
あなた自身の秘めた神聖な心の中心に  
私はねばり強い絆を結びつける

この詩篇を

(一九二九年九月十七日)

## 寝椅子

---

亜麻色の岸辺のようなあなたに私はミルク色の美しい河  
ぼんやりとしたランプの明りの下であなたは眠る  
睫毛のような草は震え　そして翼をもった鼻孔も  
海上の大気と口づけして　波のように震えている

唇の端から子供のような微笑まで  
広げられたテーブルクロスの薔薇の島まで  
そして塩辛い泉が湧く冷たい茂みまで  
私は素晴らしい終わりの無い旅を始める

それというのも大変に穏やかで美しいあなたの何を恐れるのか.....  
もしもそれが反逆に配慮した太い皺でしかなかったなら  
時々深い眠りの中で作り直されることだろう

そっけない他人の無感覚な魂を内に秘めて  
私に不気味な目覚めを知らせても無駄だった  
快いあなたの両眼には激しい意志が見えている

(ソネット　一九二九年九月二一日)

## それを知れ

---

何という頬 唇 腹 腰のくびれであろう  
私たちの澄んだ静かな視線との何という口づけ  
あるいは動転したあなたの瞳は何という眩暈  
それは何という裂けた肉体の苦い興奮だろう  
あるいははにかんだあなたの指は何という上手な愛撫  
私の手の上のあなたの手が義務のように  
何時も恋人で 妹で 優しい娘であると誓う時  
それは海賊が略奪する何という柔らかな巣だろう  
あるいはあなたの最初の喜びの何という庭  
義務とか後悔とか欲望を言うなら何でもよい  
私たちの魂が結局お互いに抱合うのは何らかの名前  
そして忠告するか脅す瞬間があれば何でもよい  
私はあなたの懐疑であり 支えであることを知れ  
そこから私の肉体はあなたの肉体に触れたのだ  
そのベッド 幸福感そして恋人に感謝しているのだ  
私の存在全てがあなたの存在の中で直ぐに流れている

(一九二九年九月二二日)

## 海賊

---

頑丈なうなじに鉄製の頭部  
隕石のように通り過ぎたのは大事な秩序の中  
未来を心配することもなく 気に入ったものを  
手に入れたり手放したり 好きなことを行うのは  
焼き尽くす火のように直線的な激怒により  
発火点近くで再び燃え出す浮気心  
欲望の名においてそれ故王様や泥棒のように  
協定や良心を引き裂きながら彼が行った処は  
戦車にへばりついて強烈な力に従って  
神と名誉と囚われた美しい女たちの処

.....

優しくて疑い深い心をあなたは激しい嵐で  
一掃された瞳の中で形にするのを覚え  
その恐怖は屢々動物を飼い馴らし  
その憎しみは無力だが愛そうとする  
その心は震え 無情な力に羨望し  
その口は噛むのを望み 鎖に口づけして  
そしてその網をその気にさせる偽りの愛  
華麗な襟首はなく 彼の体を締め付ける

\*

愛する幸せがその翼に触れたのは  
残酷な競争という悲しい賭け事の中

\*

海の横に生きるのは彼自身  
その愛もまた弛緩し 欲望も苦く  
しかしその空と海は自由に走る帆船

青い世界の上にレース模様の帆が輪郭を描き  
心の光は大空のように変化して  
蜜蜂が入ったような鼻孔に果敢な風が吹き  
肉のような船の舷側は帆のように打たれ  
大変に若いその肩は薄い麻布の巣に  
慎重さと恐怖という重荷を投げ返し  
心臓のリズムによって快活で飛び跳ねている  
寒がっているが寛大さを齎す風に口づけしている

\*

コルベット艦よ！ おゝ繊細な船よ！ おゝ貴重な積荷よ！  
もしもあなたが温室の鷲のように通りすがりに捕えたいなら  
その海賊船はあなたを嘲笑するだろうし  
金色の髪の毛の中では宝石と見做さないだろう  
その光線は逃れて行き 海賊船の中の海賊船になる

\*

おゝ自然の力よ おゝ水源よ おゝ純粋な光沢よ！  
柔らかな血液の網は穏やかなミルクが流れる河  
赤く染めた死に微笑んでいる曙は  
約束もなく あなたの金色の酔いを注いでいる！

\*

「あなたが望むなら 私はあなたを愛する 望まないとしても  
私はあなたを愛する 私の海賊よ！」あなたの足音は  
踊るように 近づいてくるように 逃げるように鳴った  
同じように波はすばしこい追跡と見られ  
金色の砂に口づけして 瀕死のままにして  
焼き尽くす太陽が呑み込むのはこの薔薇の花  
このようにして無限に水が湧く泉をもった愛は  
ひっくり返り それを否定するものに再び挑む  
果実のような永遠の時を持ちながら

愛は罨の中や死の危険の中でも微笑する」

\*

「私の渴いた喉に冷たい水を！ おゝ口よ 優しい泉よ！  
悲しいかな遅すぎた！ 私はついに泉に到着した  
見てみろ！ この人生はばらばらに蒔かれる  
それらの停泊した船に乗ったのは私  
切断だ！ 斧の一撃を覚えろ  
そして自我についての私の懷疑は？ あなたの金色の体が  
震える前で私の自尊心も震えたのは一度だけだったと  
信じた以外に私は何も知らない おゝ私の〈麦藁〉よ

\*

もっと悪いものがある！ あなたの真珠光沢のイメージは  
何時も神聖な姿をして不動のためにある  
何という恐ろしい伝言！ 何という運命の泉  
何という私たちの未来！ 何という恐ろしい重荷！  
私は全てを打ち砕いたのだ 私は一撃を加えるたびに  
自我に戻る 私は行きたい処へ行く 門は暗く  
そして私自身が開けるのだ 私は地獄へ落ちる」

しかしながら海賊は泣いている 血のように熱い  
それらの涙は真っ青な顔に流れている

.....

その時優しい声で言う「この涙と引き替えに私はあなたを愛する」

(この無二の原稿をG・Lのために 一九二九年九月二八日 ペシーにて)

## 彼女は語る

---

あなたが作ったオリアーヌの像は  
何と私の心を唸らせ感動させたことか！  
細長い裸体以外のものを  
私は見たかどうか自問している

オリアーヌよ！ 見知らぬ妹  
私が泣いている時にあなたは  
微笑んでいるずるい女なのか？ 素直な涙で  
微笑む私にうっとりするのは誰なのか？

親愛なる不在よ！ おゝ私の人よ！ 全てだ！  
あなたは無敵の人なのか？  
私の愛しい重荷 言葉で言えない夢

地の果てまであなたを思い  
そして優しい余韻の中で  
希望もなく何時も待たねばならないのか？

(ソネット 一九二九年九月二八日 ペシーにて)

おゝ私の泉 大空と葦を写す鏡  
赤毛の睫毛の瞳は青く澄み 率直で奥深い！  
あなたは時々角のある何かの姿を写し  
二つに裂けた蹄は水面の網を裂いた

如何でも良いの？ 下らない影よ！ この世にないような水  
あなたは直ぐにしなやかな裸体を洗い落としていた  
私はその時 あなたの小さな手だけを感じた  
回転の速い糸巻き棒は私の上で散歩していた

そして私自身は姿を隠したあなたの魂に嫉妬し  
そこから離れた泡を奥底まで探していた  
そして最初に見た渦はあなたという生きた宝

私はその時 あなたを動揺させた おゝ純粋な光よ  
しかし 何時も砂と黄金でできたベッドを鎮めながら  
あなたは最初の純潔さを私の両眼に向けていた

(この無二の手書き原稿をG・Lのために 一九二九年九月)

## 秋分

---

梢は独り悲しい心のように撓み  
大平原の遠くから唸るような声が聞こえる  
風が吠えるような声は水の中を駆け回る  
羊毛のような雲の群を追い回している  
群衆と突然の恐怖による喧騒は私を  
激昂と嘆きと音楽に閉じ込める  
私は聴く　そして心の中で後悔と希望と欲望が  
とらえ切れない急流のように生れる  
私は自分を海の中の小船か鞭で打たれた葉のように感じる  
私の精神よ　あなたは翼の力で何をしたの？  
あなたは希望を感じながらも泣きながら  
夜と同じように陰気にさせる日々の中で何をしているの？

私は停泊地を守る岩で出来た階段を  
吹き上げていくこの風を覚えていた  
西の先端には収穫した穀物と希望と溜息の  
あらゆるものが死ぬためにやって来て  
より遠くの土地の使者であるあなたは跳び  
光輝く幸福の証となる場所へ  
花もない荒野を着込んだ小丘の上で  
雷のように怒った泡の無情な音の中で  
訳も分からない嘆きの流れを注いでいる

しかしながら気がかりは雷のような波  
暗黒の思想が私の上で限りなく転がり  
海のように　天国のように私の中の嵐  
何のためか？　言葉と自然　怒りと雷雨の  
この無限の混淆を望んだのは誰なのか？  
私をすっかり鞭打つ波飛沫と苦い涙  
そこで私の口は海の塩辛い味を知った

そんなものだ　暖かな波の上で

今は大きな雲の絨毯が広がっている  
湧き出た後の水は再び落下しなければならない  
急流は穴を掘ってその川床を噛まなければならない  
怒った大河は黄色い波と関係しており  
質素な茅葺の家の破片と玉座の破片  
心からの願いとして光輝いている閃光は  
他人の心の上に傾き 既にゆらめいていて  
その大洋の水滴は大変に長くぶら下がり  
ついにはそれを待ち望む波間に沈む  
回帰であり 忘れっぽいこの世の際限のない循環  
そうだ 同じ月の下で 同じ場所で  
その流れは束の間の箱舟を解体し  
新しい春と同じ妄想にも備え  
大気の精シルフが笑ったのは新しい誓い

ところが何も終わっていないとその心は断言した  
そして 嵐の夜に閉め切った部屋の中で  
その心は秘密の仕事に精を出す  
その秘密を漏らす異教徒の世界を否定するものは何もない  
それを満たす苦い波を拒絶しながら  
根強い思い出の固い結び目を 過ぎ去る秋に  
永遠の春を縫うことを止めるものは何もない

(思い出のためにG・Lへ 一九二九年十月五日)

## ガブリエルへの献辞

---

プラトンは黄金の光と魂の旅路！  
おゝ無垢な精神としての大空の偉大な心象よ！  
それがあなたを捉えるや否や私の魂はあなたを理解し  
黒い薪の山から引き出したのは純粋な炎

肉体という嵐は大波の刃となった海原  
花崗岩の岩場に轟いて取り巻いていた  
無駄なことに高慢と自らの悲劇に酔った  
追放された哀れな心に行く道は閉じられていた

何故なら あなたは大空を誇示し重苦しいこの世で  
リンパ液と肉体と結石と血液を生み  
怪しげな欲望と甘い脅威を与えていたから

不正行為への怒りと致命的な不安を与え  
私に全てを理解させたのは青い色の明るさであり  
青い眼の視線であり そして永遠の時であった

(『プラトン』のために、ガブリエルへ 一九二九年十月十一日)

# 人生

---

乾燥した海藻と焼かれた荒野の香り  
動き易い丁度良い洋服 あなたの美しい体  
金色の背光の中に永遠のあなたの両眼  
燃えるような乱闘の中で破れたりノンの織物

あなたの奇妙な手による翼への愛撫と  
燃える航跡は見知らぬ大地の果てと  
数々の財宝を探し回りながら  
海水の力をあなたの処まで齎していた

薔薇の花束とエリカと月桂樹の葉  
大きくなった小低木としなやかな蔓植物は  
柏の樹を巻くキツタよりも緊密に素早く結びつく

それと同時に無関心の世界を巻くキツタよりも緊密で素早く  
次の散文に向ってでこぼこに巻きつけたその人は  
待つことを知った人であり 辛辣な勝利者でもあった

(彼女の詩集のためにL・Gへ 一九二九年十月)

## 孤独

---

私たちが一緒に煙草を吸った場所に戻る時  
私は期待して心が震えるのを感じている  
薄い網が忍び込んで私の両眼に及び  
それをあなたの波の髪型にしたいと思う  
涙を流す湖上でときめく私の瞼は  
魅惑的なあなたの姿をした翼のある輪郭と  
何か毅然とした襟の動きを探している  
私はあなたの真似をして少し首を傾げる  
あなたは突然に安心して多分 私に注意深く手を任せた  
もしも清純な女性で 優しく触れたなら  
私は温かさを手に入れたと信じて甘く魅惑される  
暖かい監獄の中で何物かが動いた  
ほんの少し！ 私の掌にあなたが帰って来たのだろうか？  
香水で重荷が軽くなる あるいは薄荷の香りだろうか？  
吐息が私の周りに吹かれ 心を暖める  
溜息という希望と欲望という翼は  
眼に見えない飛行の中で突然に私に触れる  
私の肩の上に小鳥の重さを感じさせてくれた

(彼女の詩集のためにG・Lへ 一九二九年十月)

## 沈黙

---

何も言うな 影は優しく 時間が落着かせる  
憔悴した秋は震える靄の服を着る  
赤褐色の葉から一条の微光が滑り込む  
そんな風にして多分 幸福の思い出とか  
歓喜に溢れて流す涙の予感が  
人生に胸をときめかせる金色の縁飾りに輝く  
あなたが知っている世界は睫毛を照らし  
そして あなたの存在はそれらの緻密な紐に巻かれる  
恐らく 思考したあなたの青春は大空そのもの  
黒い岬と虹色のテーブルクロス  
燃えるような岩 密生した芝 金色の棒  
慎みのないそれらの茨が何度も突き刺して攻撃する  
あなたの一番の秘密は熱い影の中で  
エメラルドの平原に佇む緋の衣の神を探すこと  
あなたがこれらの永遠の儀式を心で意識する時  
ゆっくりせよ 何も言うな 何故なら言葉は残酷だから  
それらの言葉は あなたの眩きに包まれて  
海藻の動きと糸状の波を裂く  
それらの言葉は 拒絶の線を引きながら  
あなたが存在を望むものと望んでいたものを葬る  
しかし あゝ無口な女よ あなたが存在する音を聞け  
あなたは独りしかおらず 自分に正直な人で  
その性格は貴重で味わい深く そして何時も  
血液の眩きを変えたいのに拒絶している  
あなたが何時も秘密の法則に従って書き直すのは  
心を奪われた人のイマージュと  
あなたのやり方に従った精神の痕跡  
それは一層あなたに似てきて あなた以上になる  
柔らかなベッドの中での乳白色の大河のように  
波形模様の曲線の中にあなたの体は  
お気に入りのやり方に従って巻かれている

(彼女の詩集のためにG・Lへ 一九二九年十月十八日)

# 大空

---

低く垂れ込めた雲が鉛色の斜面を転がる時  
貪欲な私たちの眼前で 大空が純真さと  
虚しさ 心を癒す青色によって涙を流す時  
全てのもものが暗く 疑わしく 脅迫的で 重苦しく  
垂れ込めた靄の底であなたが考えたのは  
時間と行く道を待ちながら 純粹でもあった  
過ぎた私たちの時間の青空が見付かるだろうか？  
あなたが何時も理解するのはより良い明日が  
多分 暗い大きな雲に開いた一つの穴のように  
水蒸気だけで洗われた青空を私たちに見せていて  
それらの涙や苦しみの中で何よりも純粹だろうか？

時々 春が穀物の種子を刺激する時  
私たちが暗い大気の下で待ち伏せるのは  
陽気な明日の太陽と暗闇が全ての父親  
そして靄が太鼓の響く音を打ち  
純粹な愛をもった大空から涙よりも輝いている  
一粒の金剛石の閃光を急いで隠すのだ

秋は不安だらけの心にとって最も残酷だ  
秋は閉塞し 私たちの心に悲しみを眠らせる  
私たちの視線には不透明の白い世界が広がり  
私たちが躊躇しながら出した手に戻させる  
心の奥底では懷疑や陰鬱な期待に返させる  
おゝ嘘つきよ！ おゝ眠る者よ！ 心を信じて  
未来の曙をとっくの昔に拒絶しながら  
虚しく薔薇に包まれて大空に口づけする人よ！  
私たちの希望は全てこの陰鬱な視線に凍りつく

山の彼方のあの世は美しく真冬に輝き  
僅かに開いた大空には純粹さと冷静さの  
平然とした星たちで飾った黒いピロードしか見えず

水兵は眼に見えない翼で航海し  
純粋な光線の冷静な閃光を信頼する  
歳を取った黒い大洋！ 眼に見えない水平線！

このように灰色の大空に支配された私の思考  
私は凍ったような靄が晴れるのを見た  
おゝ青空よ あなたは躊躇した行為と  
はっきりとしない動きを永遠に拒否しているように見えた  
蒼白い光に明るく照らされているのは秋

あなたの薔薇色の顔はオパールの色彩に染まった  
危険で 余りに静かで単調な月の光を  
半分だけ残して反射して写していた  
あなたは自分だけの愛撫に物憂げで  
不毛で陰鬱な英知の大理石の私に似ていた

あなたの怪しげな夢の中で 稲妻のように  
靄を突き刺した言葉 あるいは鋭く通した視線は何なのか？  
私には分らない しかしそれは突然の華麗なる動き  
喜びのように自由で 草のように若々しい  
あなたは私の上で蜂蜜色の額を右に回転させた  
そして金色の睫毛の下に 大空からのあなたの二つの水滴は  
光り輝き 証拠を探していたこの非常識な人間に  
貞淑で無垢な魂を全て放擲していた

(一九二九年十月)

## 征服者

---

あなたの弱さに似たくはなかった  
承諾も優しい言葉も要らなかった  
私はあなたの自由な力を愛した  
あなたの足の快活な動きを愛した  
あなたの物思いに耽った視線に睫毛は秘密の閃光に  
素早く閉じられ 沈黙せず反撃に出た  
慎重への軽蔑 鮮紅色の血液の火照り  
待つ〈愛〉の矜持は滑翔するハイタカの  
飛行と同類のもの そして突然の急降下

あなたのほっそりとした指で織った  
ベルトと衣服を身に付けて、素敵な人の  
その襞の奥深くまで作り上げた夢  
そのようにしてあなたは奇妙な思考を進め  
揺れる水の中で あなたは未来を抱きながら  
淡い色の旗をつけた三本マストの軍艦は大気を振動させ  
大きく吐いた息と塩辛い波によって自由になっていた  
唯一の考えの儘に舵をとるあなたは  
無視してものとも思わない泡を何度も落下させていた

私は美しいあなたを獲物にしたが そのことをよく知っていた  
その時は何も予想せずに 何も考えることもなかった  
多分 私が悪知恵を二倍もった海賊に期待したのは  
最後には勝利者が楽しむ囚われの人であった  
新しい喜びよ！

しかし 海が突然に私の頭上を  
過ぎ去り 狂気を攻撃し 静脈の中で  
この血液を海で育った海藻で養い  
そしてあなたの鼻孔が嗅ぐのは 刺激的な香り  
そしてあなたに再び生まれるのは しっかりした脈拍  
そして私の中に再び認めたのは あなただけの味

(詩集のためにL・Gへ 一九二九年十月)

## 思い出

---

あなたへの愛が私の全てだが　あなたが知ったのは余りに遅い  
え　何ですか　この旅と偉大なる偶然の中  
そこに私たちは脆そうな小船のように放り出される  
導くのは如何なる運命で　如何なる正確なふいごか  
そして如何なる港か　あるいは如何なる暴風か？  
簡単に上がりになるゲームとは違って  
この横柄な心の中を知り得たのは何なのか？

木の葉の下の城と古い客間を  
あなた思い出すだろうか？　気晴らしか夢想か  
スカーフの襷とすらりとしたあなたの優美な姿は  
偶然の仕草を生み　あなたが演じたのは  
武勲詩と思想詩で　あなたは骰子を投げた  
眼を回し運命を軽蔑してあなたは投げた  
偉大な魂よ　しかし魂そのものは殆ど目覚めていなかった

大空に　そして感嘆した大地を祝福して  
今宵の月が蒼い世界の中に  
力強い前兆を上げているのは今も同じ  
銀色の光線の下に大変に確かな海の法則  
砂浜の波が音をあげてかき立てている  
涙と期待ともっと低俗で平凡な魂と  
自分でも分からない奥深い欲望

私たちの運命の手紙はこの確かな歩みの中で書かれた  
この酷い傷を真っ先に感じ  
陽気に笑う閃光と突然の真面目さが生まれ  
大空から両眼の愛撫と不可思議を感じるのは誰か？

親愛なる思い出よ！　光の輝きどころではなく  
曙の最初の輝きよりも懐かしい！  
もしもここにあるなら　私は時々触れられるように思う

清純な大空..... 沈む月の恋人.....

その時私の両手で鮮やかに洗われた肌は  
陶酔した処女の燃えるような仮面を受け取っている

(詩集のためにガブリエルへ 一九二九年十月)

## 景色

---

あなたの肉体は時として何か柔らかな絹織物のようだった  
散った薔薇の花が撒かれた揺りかごのように  
眠る海賊には暖かで柔らかい着物  
あなたは恋人のために柔らかな線の襷を作った  
柔らかく忘却した友愛よ！ あなたに長い口づけを！  
未練と希望と懐疑で出来ているような清純さ  
私の傍に眠っているようなあなたを包み込んでいた  
私は最早自分を感じることはなく 私の夢はあなただった

そして夢の中で最後に夢が着替えるように  
私が目覚めている時には愛しい姿で走り  
あなたの手は多分私の腕の中を探るのが精一杯で  
あなたが知らなかったのは欲望という戦慄  
他の女性はあなたが伸びた姿から生まれていた  
流れる一筋の水脈のように そして海の潮のように  
あなたの存在は私の存在を刺激し  
愛が注がれていた燃えるような布地の中で  
待ち切れない力と長い自制を掘っていた

あなたはこの天空の力で服を着る幸福な女性だ！  
おゝあなたはその力を全て感じ 何時も触っている！  
あなたは燃えるような愛を自分で守る人  
掘られたばかりの穴と曲がりくねった線  
再度閉じられた思い出は忘れられたように見える  
あなた自身への逃避 肉体は神秘的な襷  
素晴らしく引締まったあなたの若々しい両肩よ！  
私には殆どそれが見抜けず 柳の下に逃げる  
水の妖精ニフのあなたは自分だけの茂みに逃げる

あなたの赤褐色の毛並みと再会する幸せ  
彼女の確かな歩みには活力と不可解があり  
謎であるが大変うまく身に巻かれたあなたの優雅さよ！

(この無二の手書き原稿の詩集に加えるためにL・Gへ 一九二九年十一月八日)

## グリザイユ（灰色の風景）

---

暖かな春に疲労した薔薇の花が  
惜し気もなく与えられた優雅さを地面へ傾けた時  
もう決して美しい色彩を見せない  
その真珠は神の蒼白さには到達せず  
置き去りにされた薔薇の花から生まれる新しい曙  
しなやかな線は再び活気を奪い  
甘美な匂いから繊細なグラスが生まれ  
後悔の棘は花粉の味気なさを強め  
朝になると露の中で水に溺れる  
清純というよりも愛撫を和らげて  
薔薇の鬘の中で大変に生き生きと震えて潤れる大気  
香気の中に完全な夢の実を取り  
巨大な宇宙の巨大な渦巻によって  
余りに大きな力と全くの偶然との混淆

.....

真珠層の花冠と震える幸福を集め  
物思いに耽っている淡黄色の私の薔薇  
白い長めのオーバーブラウスの古い鬘から  
大洋の息吹である荒々しい動き  
奇妙な水平線の新しい大洋を思い出す  
昼間の炎と寒い季節があなたのために  
如何に堪え難い経験を形づくり  
それを望み感じるものが科学の中に入り  
如何にしてその出来事が成功を乗り越えていくか  
それはリズムを閉じ込め

現在もあなたはそれを知っている

あなたが運ぶのは暑い日中の荷物  
私は一瞥してあなたの投げやりな態度に驚き  
元気をなくしたあなたの肉体からは無声の言葉  
そしてあなたの感動 心を動かす希望  
あなた自身であること 毅然と横になったあなたの体の線  
隠された無敵なあなたの魂を取り戻すことは

あなたの弱さでさえも信仰を確信させ  
より人間的で より女性的で より私に近かった

(L・G・Lの詩集のために 一九二九年十一月十二日)

月の優しい視線が蒼白い夜に光り  
あなたはオパールを浴びて好むのは  
この回転する地球の相次ぐ眠り  
私は裸になった枝と枝が交差する中で  
傾きかけた円盤のあなたのことを思う朝

あなたがそれを知るのは辛い目覚めの時  
私の心が「否」と言うには余りに違う夢  
私は起き上がり 思考し 希望が生まれる  
不思議な言葉のような親愛なる名前を言う  
この甘美な苦悩の思い出を 甘美な夜の  
期待と結び付けるが それを白日に晒すあなた

親愛なる月は私たちが若かった時の愛の証人  
あなたが今 乳白色の光に映しているのは  
何時も高い波の流れるような髪の毛のうねり  
あなたが触れる髪の前には心臓が眠り  
多分 海の味がするうっとりさせ唇は  
半分だけ開けた口に出して一つの名前を生む  
多分 狂ったような鼻孔の発する音は  
夜に匂う昔からの香水を探し求めている  
おゝ月の光よ 退屈が眠る私の家の入口を照らせ  
私の希望と溜息と誰もいない砂漠の上に  
放擲したむなしい抱擁を照らせ  
夜の家に入ってくる優しい光線が作るのは  
優しい音を窺って保留になった愛  
彼女の夢と 吐く息と 遠慮がちな喜びは  
絹の梯子の上で遠慮も無く揺れている  
あなたの面影からはふんわりとした亡霊が生まれ  
そっと忍び込み 身をかがめ 日に焼けた金色の眉と  
絹のような瞼と 眼に見えない光に溢れた  
眠っている眼を掠めるのを夢見ている

折りたたんだ腕の隙間には甘い夢がある  
柔軟な歩き振りと幸福そうな足取りにならって  
曲がった線がゆっくりと解かれて生き生きとなる  
恋する夜に夢見ている処女のように.....

(L・Gの詩集のために 一九二九年十一月十八日)

## 灰色の朝

---

おゝ十一月の悲しい月は  
静かな朝に涙を流す！  
さようなら 赤褐色の秋よ！  
暗い部屋には明けの薄明

あなたの進路は煙のように曇り  
おゝ霧の立ちこめた大洋よ！  
おゝ旅立ちよ 大口を開けた深淵よ  
私の恋人を何処にやったの？

大変にきれいな姿をした  
私たちのイメージは長く続くの？  
悲しいかな！ 化粧をした眉には  
何という憂愁の魂なのだろう！

あなたは柔らかな外套を着て  
疲れた体から読み取れたのは  
二滴の水のようなあなたの両眼が  
言いたかった その未来のこと

(ルイーズ・ガブリエルへ 一九二九年十一月二二日)

美しい両眼よ 花々が咲くずっしりとした土手で  
あなたは涙を流すような未来を考え込んでいたの？  
美しい手よ ずっしりとしてぼやけた幹の上で  
あなたは力強い一押しを試してみたの？  
大地と人間の重さのぼんやりとした関係  
肉体の赤い炎 欲望が怒らせている  
沈黙した自尊心の遅鈍な望みを  
若い魂よ あなたは昔からの苦悩の重さを  
臆病な愛や冷静な欲望の重さを  
窪んだ道に沿って足を引き摺って量ったの？

それらの幹は毎年冬になると嵐に耐え  
波間に引き裂かれる岩場 崩れる防波堤  
苦しめる荒野 締め付けられた両腕のすべて  
折り曲げようとする努力 啞然とする欲望  
注意深いあなたの眼は一つの星となって見抜く  
待ち伏せした刺はあなたのヴェールを引き裂いた  
躊躇した女の猟師 あなたが行く道を探し  
ぼんやりとした薔薇色のあなたの眼差しの奥に  
それらのすべてがあなたの苦い翌日を梳いているの？  
あるいはあなたは悪賢い姿をして  
たった一つの欲望と運動の力が強くて  
風に弄ばれたヴェールのように自分の道を探すの？

時には言葉という生き生きとした輪の中で  
退屈な管理人が幾つもの役を配分していた  
魂の閃きが消えた肉体と肉体の間で  
先端を光らせながら ぼんやりとした周りを  
あなたはまるで探していたかのように一瞬の間  
物思いに耽ったあなたの優しさと本当の惨事の影

節くれ立った楡の木立の下の曲がった道に

木いちごや石ころだらけの土手の日陰に  
疎らで気まぐれな黒と白の色をした雌牛  
細い足は枝に軽く触れると向きを変え  
その角は汚れが無く 大きな眼は神秘的で  
その深淵は多分無関心であるか 好奇心が強く  
黒く揺れ動くその泉の波紋も震えているが  
渦は無く 大きな影に幾つもの事物は消え  
愛のことを尋ねても誰も答えない

あなたは切株になるまでは雌牛だ  
食事の時間には煙でできた網を真珠の空へ上げ  
あなたはそれを吸い あなたの鼻孔が渴望するのは  
別人の奇妙な空腹と 別人の脅威  
灯が点り あなたの睫毛は瞬き  
その辺りの浜辺一帯の海のお喋りよりも  
大空の上はもっと変化し 雲の端から落下し  
あなたは探す そしてあなたの従順な動物の血は  
実現可能な善悪をすべて保留にしてあなたを変え  
足の上には水の精ニンフと月の女神ダイアナ  
そしてあなたに従順な蔓植物の動きの中で  
期待する幸福で震えるこの空しさの中で  
あなたは欲望を抱いた柏の幹を描く

長身の疲れた歩き振りは彼なの？  
抱締めた力と柔らかい演劇は勿論  
彼自身のようにあり 感動そのものを目指している  
遠くに見える揺り椅子はまだ見ぬ彼自身を  
心のままに眠らせているようにあなたには見え  
はだけた胸をしていて何か穏やかな眠りで  
もしも彼には両眼しかなく ゆっくりと下に向けば  
時には火が見えて その光がそっと滑り込み  
灯台のように突然に 威圧的に 生き生きとして  
野蛮な海賊の首領が突然に抱締め  
無情に遊ぶ夢を時々は見せてくれる

おゝ雄牛の項よ 優しい両手の女王よ！

おゝ額よ ゆっくりと思考する秘密の大箱よ！

おゝ胸よ 蓄えられた力の坩堝よ！

おゝ登攀と抱擁のための足よ！ そして襷には

私の頬が蒼白くなった野生の匂い

思考はなく その次に美しく切られたあなたの顎

私の両手を切ることを約束した大理石の果実よ！

それは彼なの？

あなたは断崖 そしてあなたは赤い水平線

あなたの前に存在している私は遠くて

破滅の淵にいる兄に奇妙な音を出している

運命は多分あなたがそれを終らせるのを望んでいる

おゝ海よ 私はあなたを恐れる！ でもそれ以上に愛する

あなたの満潮と引潮の動きを前にして

遠くの浜辺まで跳んで行く夢だけを見るのは誰？

この不毛の荒野と荒々しい岩場は

既に私の足元に頑丈な支えを作っている

そうだ 私の鼻孔まで昇ってくるこの野生の

強烈な匂いを私は拒否することができる

おゝ大胆な心よ あなたは危険に満ちた運命しか感じない時

逃げることは恥でしかないと思っていた

あなたに合図せよ そしてあなたは神の勇気を感じる

いいだろう！ 私は主権者の力を信じている

夜は更ける おゝ憔悴よ おゝ平原の沈黙よ！

砂浜には優しい囁きがしてあなたは眠る

あなたは身を隠し 螺旋に巻かれて熱も醒め

水のように混ざり合うざわめきに触れ

岩礁の上にはあなただけの大洋が生まれる

あなたは怠惰な夢を忘れて喜んでいる

その農家と曲がりくねった道 傾いた船が

行き先を変える船腹のように そして

あなたの柔らかな亜麻布 帽子についた絹のスカーフ

柔らかな肌の皺に 今でも現れているのは

散歩道　そして金色の浜辺の汀の上で  
あなたは自由であり　大好きな逃走を夢見る……

あなたの神秘的な裸体の深い襞の  
冷たさからは見知らぬ欲望が生まれ  
乾燥して固く　脱毛したような岩肌の端で  
太陽に燃えた草のようにざらざらしている  
おゝ清い泉よ！　おゝ渴きよ！　おゝ傷ついた喜びよ！  
おゝ血の泉の堪え難い侵入よ  
拒んだり約束している燃えるようなロゼワインよ！

しかし　眠る魂の深い溜息は  
あなたの深淵から両眼で見る夢に遡り  
それは力強く微笑んで幸福な視線である

あなたは眠り　朝は蒼白い姿を幾つも洗い  
大空には柏や楡の樹が描かれ  
運命は幹のように固く節くれ立っている  
あなたは敢えて征服者になるの？　そして素早い動きで  
逃亡者の当てにならない時間を夢見ているの？  
あなたの両手には自由を奪われた何分もの時間があり  
逃亡しているこの世に希望は当てにならないの？  
あなたは盲目の世界の恐ろしい沈黙の重さを  
身に付けて何時もおどしているの？  
そして人間はさらに重苦しくなるの？　そして陰謀はうんざり  
そして未来に誘惑されるの？　そして過去が嫉妬している

そうだ　私は思い切る

しかしあなたの心は？　そして宮廷人の  
権力という甘い幻影があなたを女王にするのは誰？  
思い上がりの苦しみによってあなたの苦しみを治すのは誰？  
あなたの不安気な心に轟くのは嵐なの？  
あなたの裏切りは貴重な財産を全て押し潰し  
汚れた魂の人の悲しみを前にして  
愛されている証拠を見捨てたことで償っているの？

恐縮しているの？ と裏切りの海と重苦しい空が言う  
そして嵐が盲目にして 雷雨が耳を聞こえなくする  
恐縮しているの？ と浜辺と口づけしながら彼が言い  
そこには涙が幾滴も落ち まるで顔の上のようだ  
その岩は無駄なことに 欲しくて堪らなく泣いている  
おゝ額の皺は絶対的な命令を刻んでいるのだ！  
あなたの瞳は美しく 憤み深く秘められた神への奉納よ！  
旨いもの好きの口には快樂の翼  
真面目一方の下らない仲間たち  
威張り返った顔で骨の折れる計画に  
大変に熱心な共犯者たちはついに弱者になる！  
ここでは西風がストライキのようにあなたを打ち  
大洋の眩きがあなたの方に駆け上がる  
私はミルクのような処女で 虚無の力に支えられ  
私はあなたの娘になる おゝ海よ 泡のうねりよ  
私の細い手は海藻 あなたは霧の色  
おゝ私の歌よ あなたはそれが愛する両眼を描く  
あなたが恐れるのは何？ それに祝福を！  
始めから私は愛しい大地のあなたを許す

運命はそれらを花で飾った荒野に集め  
苔で緑色になっているのは暗い堀端  
両眼で見る大空の赤い稲妻を誰もが言った  
神のイマージュに抵抗するのは心なの？  
彼らの手は同じ刺によって血を流していた

(ルイーズ・ガブリエルへ 「私は物思うあなたの魂を見た」ハイネ 一九二九年十一月二九日)

(訳注) トレベロンは、ブルターニュ半島先端のブレスト付近にあるビスケー湾に臨むトレベロン島のことと思われる。

## 十二月の朝

---

怠惰な曙を待ちながら私は夢見る  
乳白色の明かりのヴェールを取り除く白い夜  
淡黄褐色のジュピターと蒼白い星たちは  
埋もれた日々を測りながら落下する  
〈時間〉は次々に毎分落ちていく  
このようにして私たちの思考と戦いは去り  
港は遠くの水平線に消えていくようだ

このようにして寒い季節の大空を前にして  
役に立たない武器を落としながら  
蒼白い女の旅人は変わり 涙はもう流さない

この惑星は回り これからも回るだろう  
恋人たちの冬そのものは当然のように過ぎ  
そして既に 曙が頭上を白くしている  
惑星は暗い深淵の上に線を引ながら戻り  
泡を立てている航跡は直ぐに元に戻り  
威圧的な船首を見張番の方に向けながら  
泡立つ波の上で押し潰された襷に駆けつける  
そして私はとっくに待ち切れないあなたの足音を聞き  
それは大地を思い出し 稲妻は陽気だが  
あなたの視線は臆病で 待つことに疲れていた  
その美しい見張番は傾き 突然に極めて好意的になる！  
すべてが心開かれた欲望によって突進する  
もう直ぐくる夏を前にした草原のように  
香水 しなやかな織物 私は愛するものをすべて待つ  
このようにして五月には同じ薔薇が咲いている

(一九二九年十二月二日)

## 朝にて

---

幸せな安らぎの中で あなたの朝は大変に長く  
温和な熱情にすべてを放擲し  
あなたは鹿毛色の薄明かりで金色の睫毛を瞬き  
優しく触れた大切な人の秘められた思い出

それは頭から離れず 過ぎた時間を戻して  
あなたは奇妙な色の両眼をして陽気に微笑む  
大変に美しく優雅な優しさがあなたから離れ  
軽い痛みがあなたを狙っている

それは身をかがめ 躊躇し 両手を広げ  
あなたは無駄な麻布の中で鹿毛色の財産から両足まで  
彼女が生きた人生のすべての領域を測定する

あなたはより曲がりくねり ゆっくりと追いかけて  
幾つもの穴へ逃げ込んだ波を突然に受入れて  
あなたは風に愛撫される海のように笑う

## ソネット

---

あなたは大人しく同意する美しい壺だった  
その朝 もうすっかり潮の香りがするそよ風  
やわらかそうな水蒸気を発散している海は  
あなたの魅惑的な白い曲線を濡らしていた

青い大空に浮かぶ蒼白い月のように  
霧が立ちこめる谷間を愛撫する一条の光  
ヴェールをすっかり脱いだあなたが如何に美しくても  
あなたは愛する幸せな男にすべてを捧げた

海水の白い泡と調和のとれた曲線  
笑っている波の 回るうねりと渦  
窪地を流れる海流の海藻への口づけ

沢山の藻が漂っている所に欲望は広がり  
透明な岩場の下で 古代の泥土に洗われる  
長い時間をかけて生きた私の真珠が光っていた

(L・Gの詩集のために 一九二九年十二月十三日)

蒼白い曙の月と真珠色の朝の光  
あなたの静謐な帰宅に私は運命に従う  
寒さと白い星と霧氷の輝きを  
あなたは既に見ていた 私はその時幸せに  
生きていた 一年の長さはあなたの静かな足跡  
あなたの顔は穏やかな気候の中で変わる  
最も優しい人のことを私の心に告げていた  
私の存在は熱く力強いものに取り巻かれていた  
私の視線が思い出させるのは夜に光る真珠  
心地よい巣 隠れ家 少しの退屈  
磁力を帯びたあなたの光る両眼の中で死んでいる  
おゝ美しい人よ！ あなたの指の予言は空しい  
あなたは無頓着な男の未来を告げる

あゝ！ その星は風土という塔をやっと造った  
私の朝はあなたの夜になる あなたは月で  
私たちの霧氷の上に傾き 枝でできたレースを通して  
あなたは彼方の雪山の頂を見る  
そこに敷かれている絨毯は足跡を消し  
白い沈黙が守っているのは彼らの夢  
すべてが眠る 巨大な都市とストライキの波  
それはあなたの心の中の苦悩が打ち勝つリズム  
嘲笑的な呟きがここで目覚める時  
黒鷲が枝を横切りながら白い女性の下着が  
雲の切れ端に落としたまま忘れられている  
おゝ眠る人の肩の上で忘却する純真さ  
月明かりの下の夜の雪よりも白く  
その唇と あなたの乳房は 余りに若い  
しかしながら恐らく蒼白い照明の光線は  
眠る女性に触れ そして閉じた両眼の上に  
愛された思い出と 眠らせるための策略と  
魅力的な欺瞞を半分ほど蘇らせ

溜息が温かい曲線の波を回転させ

琥珀と 焚かれた香によって良い匂いの穴を回す

翼のある夢と混じり合う愛人たちに暗黙の同意を与え

このはるか彼方の詩から何か予感されるものがある！

あるいは少なくとも私が愛するその予感に眩くのだ

(L・G・Lのために 一九二九年十二月二十日)

## 感謝

---

私はあなたと同じものを 暗闇の穴から知る  
夢中にさせる匂い そこには秘密の熱情が眠り  
大変に若くて自由なその肩の下に あなたから隔たって  
あなたを臣下にしたがる心配を捨て  
敬意を示して あなたの大切な思い出に従う  
甘い夢があなたの輝かしい未来に打ち勝った  
苔の生えた洞窟の中の秘密の愛撫  
あなたの姿がはっきりしない日に生まれた時  
あなたの柔らかな暖かい愛されている曲線の体が  
良い香りがする波が 溜息の中や  
交錯された夢を思い出させようとしている時  
すべては心のままに 愛撫を受けて横たわり  
ある朝 睫毛はカールされて微笑している

私の薔薇よ 私は大変に長いこの過去を知る  
退屈の空しさと 不在の罨は  
高価なエキスのあなたを疲れさせた  
気を付けろ！

しかしあなたの笑いは挑発的だった  
あなたは横になり ミルク色の腕を貞淑な優しさと  
警戒心を隠しながらその褻を私に広げる  
赤毛の乱れた髪に私の唇は手間取る  
ここでは懐疑と残酷な予感消え失せている  
あなたで一杯だ 私は息をしてあなたの塩分を味わう！

そして私は あなたの姿と結びついた私の姿の中で  
幸福そうに広がって流れる海藻のように眠る

(詩集のためにG・Lへ 一九三〇年一月三日)

## あなた

---

あなたの睫毛の下を滑るなめらかな視線は  
時には危険を楽しむ鋼鉄になる  
でもあなたは海で憔悴させ溺れさせる術を知っている  
如何なる策略もあなたの繊細な鼻は嗅ぎつける  
あなたは興奮しても真直ぐに目的に向って歩く  
あなたの魂は心を閉ざして安心して  
あなたの手の中は際立った優美さを語っている  
微笑みを知っているが 説明することはなく  
あなたの足跡は一步一步が迅速で乾いていて  
あなたの若い肉体には秘密の力があると皆が言い  
魂はその肉体と関係していても そんなに心配せずに  
確かなことは幸福が大変優しく揺れている  
でも愛撫された夢から出た柔らかな水蒸気は  
時々少しばかり深い火山の火によって赤くなる  
首の動きと相手に返す台詞の声と  
脅迫される背の高さと逃げ去る愛  
すべてが深い夜に後ずさりして混じり  
大変にゆっくりと就寝するあなたの睫毛に悪知恵が入り  
あなたの隠された力に男性的な企みが入る

しかしあなたの愛人は その存在を委ねた時間を  
よく知っていたことを思い出して微笑み 裸体を見せる

大空の幸福の下を飛ぶような魂  
鹿毛色の輝きで明らかになったあなたの顔  
そしてあなたは支柱に巻きついたしなやかな莖  
二つの青い花のように吊るされている青い瞳

(ガブリエルへ 一九三〇年一月十日)

## ガブリエルの『魅惑』について

---

水の流れに沿ってナルシスは草の姿になる  
それはあなただ！ その誓いは大事で華麗で  
日々と機会を乗り越えるために  
事故や感情さえも彫刻するために  
固定された純粋なあなたの姿そのものに従う  
絶対的な円としての神はあなたの思考を思い  
退屈という結び目を解いて不安に溺れるのはあなた  
毅然とした夜に陶醉しながら 物思いに沈んだ  
岩を拒否しているその波を選択するのはあなた  
放浪好きなあなたの魂を最初の一步に戻して  
そしてその流れを細くするのは植物本体  
不可思議な溺死者は瀕死の事態を変え  
大理石の法則や冷たい立像に対峙して  
銀色の河の中から生まれたものが殺すのは  
光の渦と変わりやすく反射する像！  
このようにあなたは不完全な愛が流れるのを見る  
あなた自身は留まって 別人になることを拒否する  
おゝ流れるナルシスよ けれども私が愛するのはあなた  
おゝ私たちの堅実だった日々をそのまま写す姿よ  
おゝ各々の事物を迂回する堅固だったものを嘲笑し  
異様なカオスでできたプリズムを通して  
拒否しているゼノンにヘラクレスの姿を与えている  
それが私が見たもので 捻じ曲がる大河を写して  
あなたは不動の岩になって河辺で思考している

(ガブリエル・ランドリミーへ 一九三〇年一月十七日)

## 少し悲しい夢

---

何と！ 今では半分蝕まれた月が  
私たちの短い時間と 待っていた空しい日々と  
接吻のない月々をこの大空に書いているの？  
私たちの落ち着いた感覚にあなたは  
私たちの取り乱した嘆きの後で不実な月が  
空しい潮で膨れるように眠りを与えるの？  
恋人同士を掻き立てるこの生き生きとした衝動の後で  
柔らかに触れる地点にすべてが戻るの？  
それはあなたの航跡の中で迷っている小舟で  
あなたの移り気な顔に従っているの？  
親しい微笑みを浮かべている恋人は  
雷雨になって 肉体の波間の中で回転して  
幸福そうに呑気に眠る子供の中で  
乳白色の海のように平らになれるの？  
そして自我はこれらの血の波に酔い  
もっと大きな海へ運ばれていく死んだ天体  
あなたの純粋な法則だけに従って行くの？  
そして空しく嵐が要求する平和は  
四季と同様にこの世からやってくるの？  
愛すること 眠ること 夢見することは  
物思いに耽った海の大きな船のように  
相次いでやって来る波を砕く水平線にあるの？  
この世のものならぬ食事で満腹になった私は  
幾つもの月になって大空に戻ってくる無声の神と  
私に聞こえない春の声に感謝する  
私の親愛なる春は青くそして金髪で  
あなたの柔らかい髪と大好きな窪み  
あなたの真っ赤な血とその激しい流れ  
あなたの泉の音とか不吉な寒い朝に従って  
あなたは私の執拗な嘆きを受入れる  
おゝあなたは私の宇宙であり森であり豊かな髪だ！  
あなたの腕は柵 私の素晴らしい監獄だ！

眼は私がちらっと見た大空だ！ 口は私の糧だ！

あなたは偉大な自然を受け継いだの？

無感動な力と鹿毛色の光線は

思考しない盲目の愛の網の中で

冬と春と私たちが抱き締めた魂を

謀反の心配もなく耐えていたの？

私は夢想して あなたの微笑みの閃光に答える

水の底は透明であるが 人はその底を見ない

悲劇が生まれている湖の深淵は公平で

私が權で打つと大きな鏡が震えている

しかし精神は苦い溜息に目覚めながら

簡潔な言葉で私に言う「あなたは海を愛していないの？」

(ガブリエルへ 一九三〇年一月二一日)

## 異教徒の詩

---

あなたの手は注意深く私の項に愛を語っていた  
私は物思いに耽ったあなたの姿がその時  
如何なる物も動かさないように見えるその神秘に驚き  
全てが決して受け取らずに与える原因になっていた  
おゝ絹のような睫毛の策略よ！　そしてその肩の  
柔らかな曲線よ！　愛撫で狂ったような横顔よ！  
それでも女は静かに　そして強い男を待っている

あなたの金色の装飾を嗅ぎつけるのは美食家  
平然としている野獣　その力の確かさ  
そしてその毒舌は享樂を貪り  
そして拒んでいる！　おゝ森の妖精の遊びよ  
牧神が王の愛撫を真似ている時  
満足しているその眼は全ての物を拒絶しており  
薔薇の花びらを怠惰に噛んでいるのだ！

このようにしてあなたは見知らぬ道に迷い  
私はあなたの両手しか愛さないと誓っていた

(一九三〇年一月三十一日)

## 釣り人

---

私は燃えるようなそれらの頁からあなたの全てを知り  
大変に用心深い文章もその炎によって乱れ  
口づけと愛撫を限りなく蘇らせている  
その魂は別の魂と接吻し 運命に挑み  
私たちの肉体の間に海嶺を置いている  
そして時として香気が私の鼻孔を広げ  
肉体は崇められ 孤独な私のために思考し  
経帷子の下の穏やかな春を暖め直し  
雪から白い顔までが清純さを欠いたしるし  
私には何が欠けているの？

殆ど何も無い！

あなたは居る

私の二本の腕は夜の中で空しくあなたを探す  
私は夢見ていた.....

目覚めは悲しい一瞬

再び暑さが私を取り巻き私に触れる  
風味あるものが熟し.....

しかしそれは私の口でしかない

存在するものは長く 喜びは温かく  
私に軽く触れて自己を知る.....

それは私の欲望でしかない

あなたのいない空虚に私は幾つもの思考を投げ入れ  
風に運ばれた金色の木の葉のように  
再び愛や遠い夏のことを語っている  
そして陰鬱な大嫌いな深淵の上では  
無敵の炎が消えた表情をしながらも  
湯気が立つこれらの黒い伝言の全てが心に触れる  
白い上の黒い灰はあなたの両眼の象徴  
騒がしい心に震えるのは細長い道筋  
私が遠くに放り出して引き上げるのは哀れな網

非常に弱くて岩が破いて仕舞う網  
そして営々として何時までも作り変える希望

あなたが愛人の両手で戻すことができるのは  
美しい緯糸で織られた巧妙なひも  
あなたの体は 愛する思考で香気が満ちた巢

(ガブリエルへ 一九三〇年二月七日)

## 冬の到来

---

恐ろしい風と空から降る涙の間に  
蜂蜜の味がする冬の柔らかな太陽  
かざした手のように暖かい光線は  
薔薇の蕾が眠る森から放されていた  
余りに速い！ 決して花が咲かない寒そうな希望  
拳で殴るように冬が顔を叩いている  
素早く確実に 骨のような大地の上で鳴っている  
自然にはもう踊り子の優雅さはない  
自然はゆっくりと希望を前進させたり後退させる  
既に朝が夜の陰からはみ出している  
しかしその光は激しく 貪婪な深い穴を  
蒼白い大空に掘っているのは冷酷な大気  
両眼は その底まで明るくする優しい眼  
しかしこの光が生まれる暗い深淵よ！  
おゝ意味の無い透明さと明るすぎる純粹さよ！  
あゝ！ 全てが読めて私の気に入るようになり  
この水晶の中には 優しい奥深さが輝いている  
しかしその表面は固まり 私の情熱を凍らせる  
私は遠くの蒼白いあなたを認める おゝ私の星よ  
愛に溢れた眼差しとヴェールを取った伝言  
あなたは大変確実に帰り 大変に生き生きとして輝く  
しかしあなたの熱は近く あゝ私にはそれがない  
再び閉じられた花冠でできた衣服  
金色の昆虫はそこで愛した屍を探し  
血の嵐が生んだとどろきは大変に近く  
踊っているような波の上には狂った心  
そして私が知らない唇の深い口づけ  
あなたは私が崇める怪物を知らない  
海の渦巻という最高に美しい逆流  
深淵と隠れた太陽の明かり  
黒い太陽 私の人生の声を聞く燃えるような渴き  
それら全てを私は失った あなたの泉は心を奪われ

私の泉と混じり合い 絡み合って  
体を曲げた口づけは誓いよりも力強い  
戸外の私の体の表面は テーブルのように簡素で  
空しい太陽しか感じない この冷酷な大気よ

(ガブリエルのために 一九三〇年二月十日)

## 五行詩

---

乳白色の霧にあらゆるものの姿は消え  
今朝の私の人生は疑わしい夢想でしかなく  
付近の樹木は白い曙にきらめく  
霧氷が描いている線は傾いて白く  
大地は軽はずみに出た芽を閉じ込めている

しかしながら昨日という日は太陽が殆ど上空で  
燃えていて 弓の射手のように薔薇色の霧を貫いた  
希望の温もりがあらゆるものを愛撫していた  
一羽の鶴が次にくる恋愛のために囁き  
そしてリラの木は陽が長くなるのを感じていた

今ではそれは隠れ家であり眠りであり沈黙である  
私の愛はこの蒼白い放心に燃え尽きていた  
私の手は躊躇して震えて 不安な心は  
この霧の中であなたの何かのしるしを探す  
消えた姿の何かの予感を探している

あなたの倦怠した魂の中には今でも夜がある  
私が見てしまうのはあなたの息と腕の皺  
そしてその上に巻かれたあなたの肉体は  
遠い祖国の未練に目覚めたいと思うことはなく  
私たちの希望は騙され 愛は傷ついていた

「何故考えるの？ 何故なの？ 厳しい掟で  
厳格に完成した世界で 高潔な心は  
狂気だらけの命令を何処で認めるのだろうか？  
私が光り輝くダイヤモンドでできた壁の表面を  
切り取ったりしないのは そんな風に私は望んでいたからだ

あなたを愛していないのか？ 違う もっと愛することなんか  
私には分からない さようなら私一人の恋 私は泣かないのか？

構うものか　もしも門を閉めたなら希望は戻るだろうか？

私の意志は何時も弱い心に負けてしまう

決して勝者のいない監獄を私は望んでいる

その後で私が期待し愛しそして企てるのは

侮辱を償うことに結び付ける大空と大地

私が自分自身に慣れても許せないことがある

それはあり得ることだ　私は自分の心に身を委ねている

奴隷でいることを監獄が守っているのも　自由なのだ！」

そんな所は実際には修道院で　馬鹿正直で口が悪く

その壁を無駄に叩いているのは彼の心だけ

そして遠くを見定めた眼は確かな隠れ家を見る

非常にしっかりとした欲望がそれを守り

額が固くなった世捨て人は貪るように見つめる

あなたも同じだ　それしかないなら牢番を騙して

（それもあなた自身だ！　あなたは自分を縛りたがった）

あなたは燃えるような両手を浸しに海岸の波間に来る

冷たい鏡のような水面にゆっくりと波が流れ

あなたはこの海の中に投げ入れた鍵を捜しに来る

しかし希望の生命力は強く　私を見捨てない

私は固い大地の下に泉のような音を聞く

私はもう直ぐ植物の芽が開花するのを感じる

春が来る　私は優しい息吹を受け取った

私たちを嘲笑する人が踊る足音を私は聞いている

小鳥がアルペジオの歌声を何度も繰り返している間

私は雪のひげを付けて笑っている冬を見ている

## 三月の三行詩

---

空が暮れる 大地は大きな海綿になる  
それを押し付けて大空は子を産むように重なり  
脇腹からは湯気が出て 好色を夢想する大地

あなたは湿っぽい風と強い香りを感じるの？  
おゝ雌馬のあなたは噛まれる轡のように  
あなたの赤い筋肉は血の付いた猪槍を待っているの？

余りに幸福なのは沢山の毛穴のある大地で  
その襞の中の大きなジュピターに似た者で  
流れるような曙までのゆったりとした長い夜だとあなたは言う

あなたの鼻の穴は良質のエーテルに疲れ  
あなたはそれを崇めていると潮風に言う  
あなたは心を打たれ 火花が剣から発していた

馬になったあなたは 柔らかな砂丘の上を駆け足で跳ねる  
遊びに駆り立てられて野性の馬のように行ったり来たり  
入江の上部に張り出している岩に後脚で立っている

鹿毛色したあなたの胸前 青い雲の上で  
あなたは幻想的なあなたの姿を突然に描き  
燃えるようなたてがみを風の指に委ねている

しかし盲目の大洋がこのイマージュを覆い隠し  
泡立っている何本もの襞には季節がなくなっていて  
その掟はさらに奥深くこもっていて さらに野蛮だ

あなたの呼ぶ声は偉大な歌に消される  
「それは決して歳分からない青緑色の口づけと  
絶え間なく鼓動する心臓と不毛の大空を愛するの？

欲望よ あなたはこの大洋のように戻ってくる  
私の血の付いた丈夫な細長い皮ひもにすり減るの？」  
こんな風にして別の海岸では美しい女囚人がいる

時々は体を揺らし 虚無という狂人  
大きく口を開けた深淵の際限のない息をする本  
後脚で立つ愛と褐色のたてがみ

(ガブリエルへ 一九三〇年三月一〇日)

ガブリエル詩集（上）

<http://p.booklog.jp/book/115215>

著者：アラン（翻訳：高村 昌憲）

翻訳者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/masanorit/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/115215>

電子書籍プラットフォーム：パプー（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社トゥ・ディファクト